

演劇ワークショップ実施機関の 振り返りより

テーマ

『表現とコミュニケーション』

【目次】

ワークショッププログラムのねらいと留意点	・ ・ ・ ・ ・	282
1．私立新生保育園	・ ・ ・ ・ ・	283
2．市立平野東保育所	・ ・ ・ ・ ・	297
3．市立日本橋小学校・日本橋小学校附属幼稚園	・ ・ ・	316

本資料は、演劇の手法を活用したワークショップの内容について、各実施園での展開と事後の振り返りの記録としてとりまとめたものです。本編「具体的プログラム」の190ページから掲載している「演劇の手法を活用した表現とコミュニケーションワークショップ」と併せてご参照ください。

【ワークショッププログラムのねらいと留意点】

（新生保育園、平野東保育所）

ワークショップ講師やアシスタントがまず子どもたちと仲良くなり、子どもたちから信頼を得ることで子どもたちが安心して表現できる環境をつくる。

初めてのことに楽しみながら参加できるよう、講師とアシスタントがワークショップの進め方に配慮し、子どもたちをサポートしてできるだけ恥ずかしさや不安、恐怖感、緊張感などのストレスがない状態を維持する。

まず一人一人の存在を認め、そのこどもらしい表現を大事にすることからスタートし、自分の表現に自信をもつことで楽しみながら思いきり表現できるようになる。

言葉（セリフ）だけではない、身体や声を使った表現を大切にする。

個人の表現活動から徐々にグループでの創作活動に移行し、演劇作りと発表の時間を大切に

する。
自分（たち）の表現を観客にどう見せたいか、また何を伝えたいのかを意識した作品づくり。

（日本橋小学校・日本橋小学校付属幼稚園）

年齢で区別するのではなく、5歳児と小学生1年生、両者が交じり合う「かかわり」を大切に

にする。
ワークショップ講師やアシスタントが子どもたちと仲良くなり、彼らからの信頼を得ること

で子どもたちが安心して表現できる環境をつくる。
まず一人一人のそのこどもらしい表現を大事にすることからスタートし、自分の表現に自信

をもつことで楽しみながら思いきり表現できるようになる。

言葉（セリフ）だけではない、身体や声を使った表現を大切にする。

演劇を自分たちで一から創作していく作業、創作プロセスを大切にする。

個人の表現活動から徐々に複数での創作活動に移行し、個人の考えや希望を伝えあい、アイ

デアを出し合ったりしながら参加者同士で物事を決定していく。

自分（たち）の表現を観客にどう見せたいか、また何を伝えたいのかを意識した作品づくり。

上記に焦点を当てたプログラムを組み、これまでの学校・幼稚園生活で培ったものを生かして、演劇表現をのびのびと楽しめるような時間を過ごせるようにする。

準備物：椅子2脚（こども用でも大人用でもどんな形でもよい）

段ボール箱2～3箱分（こどもの身体がすっぽり入るくらいの大きいもの）

養生テープ（色つきのもの・何色でもよい）

名札用の布ガムテープ

名前書き用のペン3本（ポスカなどのアクリル製または油性マジック・何色でもよい）

ボール

養生テープは粘着性の弱い布テープで手で簡単にちぎれる。舞台のラインをひく際に使用

参加者の服装：動きやすい服装であればどんなものでもよい

1. 私立新生保育園（実践報告）

「1回目 10月21日 13時 - 15時」

講師：わたなべなおこ、アシスタント：綾田将一・青空まる子

参加者：5歳児24名

会場：三階保育室

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>プログラム：</p> <p>あいさつ</p> <p>・講師、アシスタントの自己紹介</p> <p>「私たちは宇宙人です」「演劇でみんなと一緒に遊びたいと思います」</p> <p>・舞台をつくる。養生テープを四角の枠に当たる4か所に貼っておき、子どもたちがテープで間をつないでいく。</p>	<p>・子どもたちが少し緊張しているようだったので、初対面の講師陣に対して興味をもってもらうため、あえて「宇宙人」という自己紹介にした。</p> <p>・舞台づくりという体の動きを伴う簡単な作業をすることで、集中力を高め緊張をほぐした。舞台づくりの作業中は、お互いの距離を縮められるよう、積極的に子どもたちに声がけした。</p>	<p>・初対面であるということと、「宇宙人」という自己紹介もあって、どの子どもも興味津々で話を聞いていた。</p> <p>・テープをととても丁寧にすき間なく貼っていた。</p>	<p>・何か分からないが、これから特別な楽しいことが始まるということ、子ども自身が感じ取っていた様子であった。</p>
<p>自己紹介</p> <p>・3人の講師陣の体に貼ってある子どもたちの名札を、一枚ずつはがしながら読みあげて、舞台に上がってきた子どもに名札を貼り付け、握手する。</p>	<p>・自分の名札がどこにあるのか、読みあげる前に自分の名札を確認する時間をつくった。そのことで、自分の名前が呼ばれることに対する興味を高め、舞台に上がって人前に出ることに抵抗をなくすようにした。</p>	<p>・興味、興奮、どうしていいかわからないといった様子から、講師に付いている名札を無理にはがす子どももいた。また、名前を呼ばれるのを待っているときのワクワクした表情も印象的であった。</p>	<p>・普通の保育場面なら止めている場面（無理矢理はがす）もあったが、それもそのこどもの表現として受け入れる、認めることによって、緊張もほぐれていった。</p> <p>（表現 よい悪いではなく、その表現自体を認める（一般的な評価軸で見ない））</p>

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>メインコンテンツ 「舞台の上で表現してみよう」</p> <p>【1】変身してみよう (たまごから生まれるショー)</p> <p>・2つの段ボールにそれぞれ1人ずつこどもが中に入り、講師が段ボールをコツコツと叩く(親鳥がくちばしでつつく様に)。生まれる雰囲気が盛りあがった時、講師が段ボールを開け、こどもが飛び出す(生まれてくる)。</p> <p>生まれたこどもが次のこどもを選ぶ。</p>	<p>・段ボールを被せてから開けるまでの間、一人一人に時間をかけるようにした。日常では味わえない「たまごの中」の真っ暗な世界を十分に味わうことと、その後「たまご」から飛び出し外界に飛び出していくこと。時間をかけて丁寧にを行うことで両方の世界をともに実感できるよう配慮した。</p>	<p>・「したい!」と手を挙げるが、いざ舞台にあがると、少し恥ずかしそうにしているこどももいた。また、「いや」と言って、客席の後ろの方に行ったり、保育者の膝の上に座りに行く(不安)こどもの様子もあった。</p>	<p>・どんな表現でも認めてもらえたので、段ボールに入ったまま動いてみたり、音を出してみたり、という動き、表現が出てきたのか?</p> <p>・今までなら、これを「表現」として捉えることに気付かなかったかもしれない。</p>
<p>休み時間:</p> <p>・こどもたちは水分補給やお手洗いなど、しっかり休憩を取る。</p>	<p>・休み時間中も、スキップや会話など、こどもたちと積極的にコミュニケーションをとった。「宇宙人」に関する質問にも丁寧に答えた。</p>	<p>・3人の「宇宙人」から離れようとしなかった。</p> <p>・「宇宙人」に対して、質問したりスキップをとる中で、かかわり方を試していた部分も見られる。</p>	<p>・こどもたちは、半分信じ、半分嘘だという思いをもちつつも、宇宙人に付き合っている様子だった。こどもなりの社会性の表れか。</p>

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>【2】デモンストレーション（舞台上で変身してみよう）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・正方形の舞台を新たに作る。養生テープを四角の角の4隅に貼り、舞台同様子どもたちが間をテープで埋めていく。 ・講師から「この四角の中が舞台、その外は客席です。舞台の中に入ると自分ではなく、何かに変身し、出ると元に帰ります。」と説明をする。 ・まず、講師によるデモンストレーションを行う。ピョンピョンと跳んでみせて、「何に変身しましたか」と問う。「かえる」「うさぎ」「うさぎさんでした」「でも時々かえるに見える」「猿」「ゴリラ」「チンパンジー」「ゴリラでした」 ・変身したい子どもを募る。「何に変身しますか？」「最初に言うたらあかん」と子どもから意見が出る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・次の段階に抵抗なく移れるよう、子どもたちの心の準備を整えるために舞台づくりの作業を行った。作業を行うにあたり、どういう風に舞台をつくってほしいか、時間をとって説明した。 ・変身のデモンストレーションは子どもたちになじみのある動物を題材にしたり、逆にわざと判断が難しい微妙な表現にしたりして、舞台を「見る」こと、人によって見え方が違うことに意識を集中できるように配慮した。 ・してみたいと思う子どもを募り、まずは積極的な子どもの意思を尊重した（意志に関係なく順番に当てたりしない）、何に変身するかを、先に宣言してから行っても 	<ul style="list-style-type: none"> ・少しずつ、ほぐれてきた様子である。 ・照れてしたがらないだろうと思っていた子どもや、普段表現することが苦手な子どもが、手を挙げてなりきっていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・こどもの表現していることを、言葉にしてナレーションするだけで、一つの物語となり、同時に観客もひきつけられていくものなのだ、と感じた。

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>・こどもたちの変身 ペンギン クマ サン マ ペンギン 猫 ア ナゴと続く。</p> <p>猫 犬と出会う が、追い払う</p> <p>チンアナゴ(複数) 漁師が捕まえに来る が、捕まえられずに帰 っていく</p> <p>ジャガー トラが 襲ってくるが、撃退す る</p>	<p>よいし、秘密にしておい て後から見ていたこど もたちに当ててもらう 形でもよい。どうするか はこども本人にまかせ た。</p> <p>・何度も手を挙げるが、 実際に指名すると「やっ ぱりやらない」というこ どもに対しては、それは よくないこと、みんなに も迷惑をかけることを 伝えた。</p>	<p>・普段から、このような 姿が見られるが、いつも は他児が止めている。こ のときは、いつもと様子 が違うからか(講師とい う他者がいる状況)、止 めることができなかつ たようだ。</p>	<p>・講師の先生に言っても らえたことで、また集中 できた。</p>

「2回目 10月27日 13時15分 - 15時30分」

講師：わたなべなおこ、アシスタント：綾田将一・青空まる子

参加者：5歳児24名

会場：三階保育室

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>場づくり、あいさつ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・舞台をつくる（初日同様こどもたちがテープを貼っていく） ・講師の体に貼ってある名札の数をこどもに尋ねる。3色のペンでこどもの名前をかく（後半に、3チームに分かれて話をつくる作業をするため） ・宇宙人のあいさつをする（名札をこどもに貼り付けた後、こどもを抱きあげる） 	<ul style="list-style-type: none"> ・こどもたちが安心感をもって始められるよう、初日と同じパターンで開始した。 ・あいさつの段階で前回よりも積極的にスキップをとることを心がけた。体に刺激を与えることで緊張をほぐし、舞台にあがることをためらっているこどもの恐怖感を好奇心に変えることをねらいとして行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2回目ということもあり、こどもの緊張も和らいでいた。 	
<p>変身たまご（ウォーミングアップ）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・段ボールを3個用意し、3人ずつ変身、変身したこどもが次のこどもを選ぶ。 ・最後の方では、講師がナレーションをして、アシスタントを犬に変身させ、猫の変身したこどもとのストーリーにつなげる（猫が犬を追い払う）などした。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前回と同じパターンで始まり、こどもたちの様子を見ながら少しずつ新しい要素を足していくようにして、内容が急に变化しないよう配慮した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前回、何度も手を挙げながらも表現できずにいたこども。このときも真っ先に手を挙げていた。講師に、一番に当てられ、一瞬戸惑ったようだが、舞台にあがることができた。 ・前回に比べ、手を挙げるこどもが増えた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・表現したもののからストーリーにつなげる、表現しているものを、しっかりと捉え、かける言葉一つで発展していく。

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>休み時間：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちは水分補給やお手洗いなど、しっかりと休憩を取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・積極的にスキンシップをとるようにした。 		
<p>お話をつくる（デモンストレーション） （休憩前に、このデモンストレーションの後に、3グループに分かれてストーリーをつくることを知らせておく。）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ストーリーづくり」のデモンストレーションを行う。台本に必要な内容である、登場人物、配役（何に変身したいか）場所、ストーリーなどについて、子どもたちの希望を尋ねる。 ・何に変身したいか 鶴、さめなど、いろいろな意見が出る。 ・場所は 桃が池公園という意見が出る。 ・その公園には何がある 魚、めだか、かめ、あひる、釣りをしている人、かもめなどの意見が出る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・休憩前にその後の展開を事前に知らせることで、子どもたちがそれぞれに心の準備を整えることができる。 ・話をつくって発表する作業は子どもたちにとっては初めてのことなので、一連のデモンストレーションは丁寧に時間をかけて行った。この日は子どもたちの中に、「自分もやってみよう（登場人物になってみる）」という子どもがいたので、その意思を尊重し、デモンストレーションに参加してもらった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・登場人物や配役、場所、ストーリーなど、思うことを自由に発言できていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発言をしていない子どもも、そのやりとりを見て聞くことで、「参加しているんだ」という気持ちをもっていることが、表情を見てよく分かった。

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>・そこで何が起こるか 鶴がかもめ温泉に浸かっている、怪獣が噴水で水浴びをしている、クマがシャケを採っている、さめが迷路をすいすい泳いでいく。</p> <p>・タイトルを決める (候補 - 寺の中の温泉、極楽公園、地獄の温泉) 決定「極楽公園の地獄温泉」</p> <p>・実際に演じてみる</p>	<p>・友達が、これから自分たちが取り組む新しいことに挑戦している姿を見ることで、自分もやってみたい、できるかも、という思いをもってもらえたと思う。</p>	<p>・デモンストレーションに参加しているこどもたちは、いろいろなものになりきって演じることを楽しんでいた。</p>	
<p>3グループに分かれて話をつくり、演じる。 (グループは、今日の名札の色のチーム)</p> <p>黄色チーム 「アキナ姫のいるミユとミクの国」</p> <p>・タンポポのジャングル、毒クラゲの川、サメワニが泳ぐ中に、ペンギンのあかちゃんがやって来た。そこへワニが襲いかかる。その時、鶴とジャガーがやって来て...</p>	<p>・「やりたくない」と言うこどもには絶対に無理強いしないようにした。</p> <p>・迷っていたりやりたそうなそぶりを見せるこどもには、「やってみない？」と折りをみて何度か誘うようにした。</p>	<p>・観客のこどもたちは、舞台上で演じているグループの演技をよく見ていた。</p>	

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>緑チーム 「森の中の散歩」</p> <p>・リスとハムスターがくるみを食べている森を、猫の双子が散歩して、かえるがいる池にやって来た。森にはにんじんがはえている。うさぎも散歩。猫の家に帰ると音楽が聞こえてきて夜まで楽しく続いた。</p> <p>ピンクチーム 「地獄の氷の上のクマ」</p> <p>・クマの兄弟が遊んでいる。お母さんグマが赤ちゃんを連れて散歩中、あしかの肉を発見...</p>	<p>・やりたい役が見つからない子ども、舞台に立つことに抵抗があることも、やってみたくてという思いはあったので、そういう子どもに対しては、効果音を出すことをお願いしたり、タイトルにそのこどもの名前を入れるようにしたりして、舞台に立つこと以外にも劇に参加できる方法があるんだよ、ということを知らせるようにした。</p>	<p>・いろいろな方法で劇に参加することについて、子どもたちは、とても照れたような、でも嬉しい！という感情を出さずにはいられないといった様子だった。</p>	<p>・やりたがらない子どもに対しては、その理由（やりたい役が見つからない、舞台に立つことに抵抗がある、迷っているなど）を確認しながら、演じる以外にもさまざまな参加の仕方があることを伝えてもらうことで、子どももそれを嬉しいと感じられ、次へ一歩進める基礎となっていくものだと感じた。</p>

「3回目 10月28日 13時 - 15時」

講師：わたなべなおこ、アシスタント：綾田将一・青空まる子

参加者：5歳児24名、4歳児（見学）保護者（数名が見学）

会場：三階保育室

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>あいさつ、場づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・名札をこどもに貼りながら抱きあげる「宇宙人のあいさつ」をすすめる。 ・昨日（第2回目）使用した舞台をきれいに修理するため、みんなで踏み固める。 ・昨日使用した段ボール（たまご）の破れているところを、みんなで修理する。 ・変身たまご たまごを開けると、こどもが何かに変身している。講師がこどもにタッチすると元に戻る（立ち上がる）。（後になればなるほど、こどもたちは、人間に戻そうとすると逃げようになる。） 	<ul style="list-style-type: none"> ・今日は発表という大きなイベントがあるため、こどもたちも若干不安や緊張を感じているようだったので、舞台づくり、スキップを取り入れたあいさつ、たまごを使ったウォーミングアップなど、前回と同じパターンで始めることで、こどもたちが余裕をもって参加できるよう、配慮した。 ・変身たまごはその後の劇づくりにスムーズに移行できるよう、クリエイティブな要素を足して行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・3度目で、昨日の今日ということもあってか、こどもたちにも少し余裕が見えた。 ・4歳児が見に来るということで、少し落ち着かない中にも、「楽しみ」と言っているこどももいた。 ・2回目、「あややの箱がいい」と言っていたこども 今日、そこに初めて入ることができ、それからふっ切れた様子であった。 	

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>演劇 リハーサル</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昨日と同じ3チームに分かれて、同じ話を演じるか、新しい話をつくって演じるかを含めて相談の後、発表。 ・アシスタント(青空) チーム「3匹のうさぎとにんじん畑」 <p>3匹のうさぎがにんじん畑を見つけてにんじんを食べた。おいしく食べて家に帰った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アシスタント(綾田) チーム「魔女とお姫様のお城、双子のお姫様と双子の猫」 <p>キラ姫は二匹の猫と一匹のねずみを飼っていた。キラ姫には以前妹がいたが今はいないのでさびしく暮らしている。深夜、悪い魔女が猫を誘拐。そこに勇敢な犬がやって来て魔女をやっつける。するとねずみが人間に変身。何とそれが魔女によってねずみにされていたキラ姫の妹キララ姫だった。ふたりの姫はしっかりと握手した。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・劇づくりの流れは2回目とまったく同じであること、今日は発表を2回行うこと、最初の発表は観客は入れずに自分たちだけであること、など今後の流れを事前に子どもたちに説明した。チーム分けも2回目と同じにして、子どもたちが少しでも発表しやすくなるよう配慮した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合いでは、意見がいろいろ出てきた。他グループが気になり、ウロウロすることももいた。 ・役割がはっきりとしており、それぞれがなりきって表現していた。 ・舞台に立ちたがらなかつたこどもも、効果音を出すことで参加し、それに対してナレーションが入ることで、とてもいい表情で舞台に立っていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・他のグループの様子を見に行ったりと、グループのメンバー全員で話し合いができていないグループがあったので、グループ全員で意見を出し合えるよう、保育者がこどもに声かけした方がよいか迷った。

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>・講師チーム「ジャングルの中、アキナ姫とミユとミクの国、大どろぼうを捕まえる」</p> <p>雨降りジャングルの雨がやんだ時、車に乗って青いマントを着た大どろぼうがアキナ姫の宝物を盗みに来た。ついに宝物を見つけた時、ワニとジャガーがやってきて大どろぼうをやっつけた。</p>			
<p>講師からのアドバイス</p> <p>・「3匹のうさぎとにんじん畑」はおもしろかったが、ナレーターの人の声が小さくて聞こえず残念だった。うさぎさんの動きが何をしているか分かりにくかったので、にんじんをさがす、食べる、遊ぶなど、もっと動きを大きくすればよい。</p>	<p>・1回目の発表が終わったあと、講師からのアドバイスを伝えた。「ここでこうすればもっと観客によく伝わる」「ここがはっきりしてなかったので観客に伝わらなくて残念」というように、観客からの視点を入れた内容にした。</p>	<p>・自分たちのグループへのアドバイスは、とても真剣に聞いていた。</p>	

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>・「魔女とお姫様のお城、双子のお姫様と双子の猫」では、効果音がとてもよかった。お姫様が人間に戻る時にも、効果音があればもっとよい。また、その時にもっと舞台の真ん中に出てくる方がよい。</p> <p>・「ジャングルの中、アキナ姫とミュとミクの国、大どろぼうを捕まえる」では、タイトルに名前がある3人が、後ろではなく舞台の前に出てくる方がよい。</p>			
<p>観客の前で演じる</p> <p>・4歳児が来場、保護者ととも客席の前列に着席。</p> <p>・講師から、5歳児クラスのみながつくったお話をお芝居で見ってもらうことを観客に説明する。</p> <p>「3匹のうさぎとにんじん畑」</p> <p>・昔々あるところに3匹のうさぎがいた。にんじんを探して見つけ、全部食べてしまった。おなかがいっぱいになって、楽しく遊び、仲良く家に帰った。</p>	<p>・発表会を始める前に、まず観客にこれまでどんなことをしてきて、今日これから何をするのかを説明した。</p>	<p>・講師からアドバイスをもらったことから、こどもたち一人一人に「見せる」という意識がより一層高まった様子である。実際、演じ方も全く違っていた。</p> <p>・自分が演じたものに対して、「したかったけど、でけへんかった」と冷静に振りかえっているこどももいた。</p> <p>・最後の最後で、今まで、恥ずかしくて舞台の外にいたこどもが、舞台の端から端まで走り回っていた。</p>	

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>「魔女とお姫様のお城」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ストーリーはリハーサルと同じ。誘拐された猫も帰ってくる。 <p>「ジャングルの中、アキナ姫とミュとミクの国、大どろぼうを捕まえる」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ストーリーの基本は同じ。宝物はタイトルの3人がそれぞれジャングルの中に隠している。ジャガーとワニが大どろぼうを撃退した後、あかちゃんペンギンが現われ、ごはんをもらって帰る。 <ul style="list-style-type: none"> ・観客へのあいさつ ・観客の感想を聞く <p>4歳児のこどもたち：「おもしろかった」</p> <p>保護者：「役割分担が上手にできていて、リハーサルから大進歩」</p> <p>お別れのあいさつ</p> <p>「宇宙に帰ります ありがとうございます でした」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・発表を見終わったあともそれで終わりにするのではなく、観客にインタビューし、お芝居の感想を伝えてもらう時間をとった。 <p>観客の意見を聞くことで、自分たちのお芝居が観客にはどう見えていたのか、何を感じたのか、伝えたいことが伝わっていたかを、各々がフィードバックできるように配慮した。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・日々接しているこどもたちなので、「この子はこういうタイプ」と決め付けて見てしまっているため、選択肢を狭めてしまっていることに気付かされた。

「全体を通した振り返り」

<p>演劇ワークショップに対する当初のイメージはどういうものでしたか。</p>	<p>「演劇」なので、セリフのやりとり、大きく表現するなど見せることにもっと重点を置いたものかと思っていた。3回という短い時間で、こどもたちがどう変わっていくのかも楽しみであった。</p>
<p>演劇ワークショップを実際に経験して、どういう印象をもちましたか。</p>	<p>「演劇」というものの見方が狭かった。「私は私でOK」「今の私が感じている気持ち、感情を大切に」「表現することの楽しさ」</p>
<p>第1～3回を通して、ワークショップ中のこどもたちの様子に変化はありましたか。</p>	<p>最初は、恥ずかしくてしようとしなかったこどもが、友達の後押しで「やってみよう」と思えたり、3回目にもなると「したい!」という気持ちがよく伝わってきた。3回目は、こどもたちが自信をもって表現していた。</p>
<p>第1回ワークショップ以降、こどもたちの普段の様子にどんな変化がありましたか。</p>	<p>特に、大きな変化はないが、2回目、3回目をとても楽しみに待っていた。</p>
<p>演劇ワークショップの内容(手法等)について、今後の教育・保育活動に、どの点が参考となりましたか。</p>	<p>「表現する」ということを改めて見直すことができた。役割をもって、それを演じることだけが表現ではなく、こどものその時の心の動きによって、発せられるもの全てが「表現」であること、そこをよく見て捉えることの大切さがわかった。また、ウォーミングアップも緊張感をほぐしたり、声や動きが出やすくなるためにも、とても重要であると参考になった。</p>
<p>演劇ワークショップを経験して、意外だったことや印象的だったことは何ですか。</p>	<p>普段は、言葉数もそんなに多くなく、あまり話をしないこどもが、1回目を終え、2回目の前に「早く月曜日(2回目)がきてほしい」と言ったことが意外であった。「たまごから生まれるショー」でなかなかできなかったこどもが、最後には経験でき、そこからふっ切れたように楽しんでいた姿が印象的だった。</p>

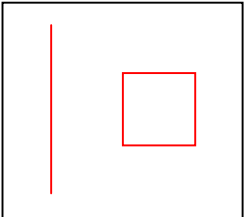
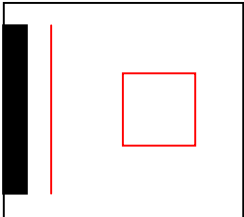
2. 市立平野東保育所（実践報告）

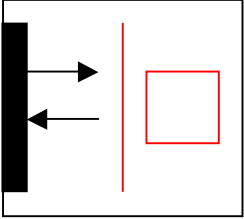
1回目 10月17日（金） 12時30分 - 15時

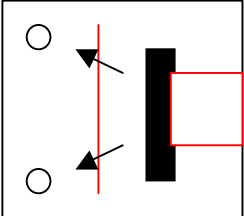
講師：わたなべなおこ、アシスタント：綾田将一・中田絵美子

参加者：5歳児23名

会場：2階プレイルーム

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>開始前：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・布テープでこどもたちの名札を作り、講師、アシスタントの体に貼っておく。 ・養生テープで舞台と客席の間に線を引く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・名札はこどもたちに分かりやすいよう、平仮名で大きく太い文字で書いておく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・緊張することなく会場に入ってくる。 ・これからはじまることに、イメージがもてないこどもが多いように見える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・数日前よりこどもたちにワークショップについて話をし期待をもたせていた。 ・講師がワークショップ前にこどもたちの部屋に来てくれたので、こどもが親しみをもったようだ。 ・体に貼ったテープのアイデアでこどもの期待が高まったと感じた。
<p>プログラム：</p> <p>あいさつ、自己紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己紹介、演劇についての簡単な説明 ・アシスタントが事前に体に貼り付けていたテープをはがしてこどもの名前を呼び、テープをこどもに貼るとともに、今、「舞台上」にいることを伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「線を越える」ということに少しだけ意識をもたせるようにしながらも、人前に出ることに過剰なプレッシャーを感じないように心がけた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の名前がどこにあるのか、友達の名前もある中から探そうとしている（殆どのこどもは探し出していた）。 ・自分の名前がいつ呼ばれるか、ドキドキしながら待っているようだった。 ・テープにアシスタントの手が伸びるのを待ちかまえ、名前が呼ばれると張り切って前に出て行く姿が見られた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の名前を呼んでもらえるときを待つことで、期待をもつことができた。 ・講師は、初めて会う人であるが、親近感もち期待を膨らませていた。 ・こども一人ずつとしっかりやりとりできる場となっていた。

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>ウォーミングアップ</p> <p>【1】宇宙人になろう！ ~宇宙人とキャッチボール~</p> <p>・椅子に座ると宇宙人になる。宇宙人になった人は、椅子の上でボールをもち、他の子どもを指名して、その子どもにボールを転がす。ボールを受けとると、できるだけ早く宇宙人の子どもと交代し、次は自分が宇宙人になる。(この繰り返し)</p> <p>・講師は、宇宙人になった子どもについて、どんな宇宙人が、みんなに伝える。(つるっとした宇宙人、ぴかぴかした宇宙人など)</p> 	<p>・どんな宇宙人かは、できるだけ一人一人に違うコメントをするよう心がけた。</p> <p>・一人だけ最後までしなかったため、どうするか尋ねたが「やらない」と答えたため無理強いしなかった。</p>	<p>・子どもは講師陣の名前をすぐに覚えていた。</p> <p>・自分がすることは何なのか、真剣な表情で話を聞いている。</p> <p>・子どもは「急いで交代する」というやりとりを楽しんでいた。</p> <p>・男の子は男の子を指名することが続き、最初は男の子ばかりになった。</p> <p>・全員が体験するようにしたため、終わった子どもはじっとせず、うろろろしがちであった。</p> <p>・「この宇宙人はキラキラしています。」「冷たい宇宙人です。」等、一人ずつ違う表現がされることで、自分は何を言ってもらおうのかをとっても楽しみにして待っている様子であった。</p> <p>・「いや」と言ってアシスタントに抱きついて最後までしなかった。</p>	<p>・こどものありのままの姿を認め、どんな表現でも受け入れられるので、子どもたちは安心して参加できたと思い、それが大事だと思った(足をブラブラさせている子どもに対して、否定をせずに「ポニョみたい」とプラスの表現で認めていた)。</p> <p>・初日が一番落ち着かなかったのは子どもたちにワークショップに対するイメージ(見通し)がもてなかったからではないか。</p>

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>メインコンテンツ</p> <p>【1】変身してみよう (たまごから生まれるショー)</p> <p>・段ボールを2つ置き、それぞれにアシスタントが付く。「やりたい」と希望するこどもの中から2人を指名し、それぞれ小さくかがんで段ボールの中に入る。アシスタントが段ボールを開け、こどもが立ちあがることで、たまごから生まれた状況を疑似体験する。段ボールを開けるとき、こどもが跳ねるなど思い思いの工夫をするので、その生まれた状況を講師が表現する。(中のこどもは、暗いところから明るいところに出ることで普段の光景が違ったものに見える。)</p> 	<p>・途中から、段ボールにこどもが入っている状態のときに、周りで見ているこどもを呼んで、箱を叩かせるなどした。中のこどもが怖がっている状況を想像させ、「次からはそっとさわってあげましょう」と声かけをした。</p> <p>・最後のこどもが段ボールに入っているとき、みんなが叩いて段ボールが壊れてしまった。中にいたこどもがとても悲しそうな様子であったので、もうひとつの箱でやり直した。</p> <p>・段ボールが壊れるというアクシデントに対し、「なぜ壊れちゃったのかな？」と投げかけ、自分の行動とその結果をフィードバックする時間をもった。やり直す際にどうすれば壊れないか、やり方を変えてみることを提案した。</p>	<p>・こどもたち全員が手を挙げ、やってみたい気持ちが高まっている。</p> <p>・棒立ちのまま出てくるこどもが多かったが「わぁー」と声を出したり、ジャンプして出てきたりする姿も見られた。</p> <p>・強く叩きすぎて段ボールの箱が壊れたり、穴があいたりした。</p> <p>・中にいたこども2人が「怖かった」と言う。</p>	<p>・あの中に自分が立ったらどうなるか。自分を客観視してどう見えるか。何が出来るか。</p> <p>「もっとやりたいと思うこども」「できるかなあと思うこども」、いろいろであった。</p> <p>・段ボールを壊す所まで行ってしまったが、周りのこどもが、壊したこどもを責めずにいたのは自分たちもその前に叩いていたからではないか。</p>

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>休み時間</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちは水分補給やお手洗いなど、しっかりと休憩を取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・休み時間も積極的に子どもたちと会話やスキンシップでコミュニケーションを図るよう心がけた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・気持ちの切り替えができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・いいタイミングでの休息だった。
<p>変身あてっこゲーム</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プレイルーム中央にテープで四角をつくり、舞台にする。 <div data-bbox="215 792 459 1010" data-label="Image"> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・講師から「この四角の中が舞台、その外は客席です。舞台の中に入ると自分ではなく、何かに変身し、出ると元に戻ります。」と説明をする。 ・講師が舞台の中に入り、舞台の中に足を入れているとけがをするので絶対足は出さないようにと注意する。 ・講師、アシスタントの2人が順番に舞台に入り、それぞれ、猫、ゴリラ、へびを演じる。何を演じているか、子どもたちが当てる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「演じること」の定義を子どもたちにも理解しやすいように言葉での説明だけでなく、実際にアシスタントがデモンストレーションを行った。その際、舞台と客席という空間の違いを強調するようにした。 ・演技に集中して注意深く見ることができるよう、クイズ形式にした。 	<ul style="list-style-type: none"> ・舞台に足を踏み入れた途端、アシスタントが動物に変身するという変化にびっくりしている様子であった。 	

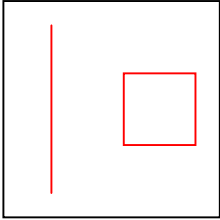
ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>・変身してみたいこどもが手を挙げ、講師が指名する(こどもたちが順番に犬、チーター、うさぎ、猫に変身する。)</p> <p>・終了時間になっても演じたがるこどもが多かったので、来週続きをすることに伝える。</p>	<p>・はじめは、こどもたちはどちらかという自分は見たいと思っている様子だったので、舞台上立つことをプレッシャーに感じないよう「やってみたい人だけやってみましょう」というように声がけした。また、演劇においては、演じることと同じくらい見ることも大切なことだということを伝えた。</p>	<p>・猫に変身すると言うが、途中で「やめたい」と言い、変身せずに終わったこどもが、再び手を挙げ友達と一緒に猫を演じた。</p> <p>・舞台の中に自分が立ったらどうなるか自分を客観的に見ようとしている。「もっとやりたい!」「あんなことできない」と思っている様子が見られる。</p>	<p>・演じたいこどももいたが見ていたいこどもも半分程度いた。見ておくのも OK と言われて無理強いされないことを知り、次への期待につながった。見ておくことを選択を認めることも大切だと感じた。</p>
<p>講師とアシスタントによる模範演技</p> <p>・「来週は、自分が演じてみたいものになって、それが出てくるお話をつくってお芝居をしましょう」と講師が次回の内容を説明し、模範演技を披露。「はらぺこロボットといたずら好きの魔法使い」というタイトルで、アシスタントが魔法使いとロボットを演じ、講師がそれを解説するという形で演技をする。</p>		<p>・模範演技をこどもたちはよく見ていた。</p>	<p>・長い時間だったが、こどもたちは最後まで楽しんでいただけたようだった。</p>

「2回目 10月24日 12時30分 - 15時」

講師：わたなべなおこ、アシスタント：倉品淳子・中田絵美子

参加者：5歳児23名

会場：2階プレイルーム

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>開始前：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3色の布テープでこどもたちの名札をつくる。その際、それぞれの色の布テープにとんぼ、うさぎ、メロンのシールを貼り、今日のワークショップのチーム分けをしておく。 		<ul style="list-style-type: none"> ・「見に来て欲しい」と保護者に話していたこどももあり、保護者が7名見学に来ていた。 ・こどもたちは、今日のワークショップを、朝から期待して待っていた（数日前から予定表を見て楽しみにしていた）。 	<ul style="list-style-type: none"> ・講師陣に、自分のありのままの姿を受け入れられていることが、楽しみにつながっていると感じる。 ・段ボールのたまごも自分たちで絵をかく等してつくり、今日はこうしようと考えたり、期待している様子が伺えた。
<p>プログラム：</p> <p>あいさつ、舞台づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アシスタントの交代を知らせる。（宇宙からUFOに乗ってやってきたアシスタント（倉品）を紹介する。） ・今からテープに貼ってあるシールごとにチーム分けすることを知らせる。講師、アシスタントが体に貼り付け 	<ul style="list-style-type: none"> ・前回のアシスタント（綾田）が、おばあちゃんのお葬式で来れないことを説明。欠席の理由は、あえて本当のことを話すようにした。一方で、新しいアシスタントについては、興味をもってもらえるよう「宇宙からやってきた」という設定にした。 	<ul style="list-style-type: none"> ・どうやって宇宙から来たのか、UFOはどうしたら来るのかを尋ね、「呼んでほしい」と言うこどもがいた。 ・自分のおばあちゃんがなくなったことなどを話すこどももあり、大切な人を失ったアシスタントに対して共感の気持ちを表している様子が見られた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・アシスタント（綾田）に対して友達のような存在で親しみをもっていると感じた。

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>ていたテープをはがして、こどもの名前を呼び、こどもにテープを貼る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんなで舞台をつくる。「今からみんなでチームごとの舞台をつくります。」と説明し、こどもが作りやすいよう、3つの四角い舞台の角に当たる部分にそれぞれ目印のテープを貼る。 ・講師、アシスタントが養生テープを切ってこどもに渡し、こどもが舞台の枠をつくっていく。完成後、テープを足で踏む、手でたたくなどして強化する。 	<div data-bbox="504 477 746 622" data-label="Image"> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・途中で養生テープがなくなってしまう、隙間のあいた舞台になってしまったが、こどもたちにとっては、少ないテープでいかに四角くできるかの勉強になっていたと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の名前のシールがはがされるのを見ていて、名前が呼ばれる前に舞台に出て行っている。 ・自分のチームの所に行き、短く切ったテープをもらって四隅の延長線上からどんどん貼っている。 ・テープが足りずに四角のラインが不完全になっても、貼り方をいろいろ工夫し、素材が足りなくてもできる範囲で四角をつくらうという意欲が見られた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・舞台を自分たちでつくることで、舞台を大切にしたり、空間の認識ができたように感じた。
<p>デモンストレーション（舞台で変身してみよう）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・舞台のまわりに集合する。 ・講師から、これから行うことを説明する。「舞台に入ると自分とは違うものになります。今から見本を見せます。何かに変身するので、当ててください。」 			<ul style="list-style-type: none"> ・見る側と演じる側が一体となっている。

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>・アシスタントがおじいさんに変身。こどもたちがふざけてたたいたり蹴ったりする。おじいさんはたまらず退場。</p> <p>・アシスタントが変身。たこと分かる。</p> <p>・講師が変身。かめと分かる。(講師が演技中に、こどもが講師の頭を力を入れてたたいた)</p> <p>・こどもたちに「変身したい人は手を挙げてください。」と声かけする。</p> <p>・3人のこどもが手を挙げ舞台に入る。講師がこどもの動きにストーリーを付けると、こどもたちはそれに合わせて動き出す。</p>	<p>・演劇をやる上で最低限守らなければならないルール「演じる人を無視しない」「演じる人の邪魔をしない」それを侵したことを伝え、演劇においてルールはとても大切であることを全体に対して伝えるよう心がけた。</p>	<p>・「これでは演技ができません。謝るかこの場から出るかしてください。」と、講師がこどもの行為に対して注意をする。注意を受けたこどもが謝まり、演技が再開される。</p> <p>・たたいたこどもが途中でトイレに行く。その場でどうしていいかわからず、バランスを取る為に行ったようであった。時間はかかったが戻ってきた。</p> <p>・こどもたちは、うさぎ(2人で)やかまきり(2人で)かえる(2人で)などに変身している。</p>	<p>・茶化した行為がエスカレートしていった結果であったが、周りのこどもたちは静まりかえり、自由なワークショップの中にも一定のルールがあることに気付いた様子であった。</p> <p>・ストーリーが展開していくのを見て、普段の生活の中で絵本などをよく見ていて、想像する力がついているこどもがいると感じた。</p>

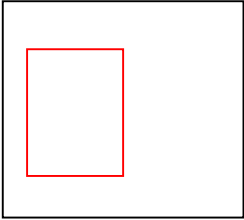
ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>「猫が隠れてチョコを食べている。いいにおいがするねとうさぎにばれた。猫は逃げた。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・こどもがかまきりに変身する。 ・こどもがかえるに変身する。 ・こどもが猫に変身する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・舞台の中でこどもたちが行っていることを全て「表現」と捉え、表現の中で問題を回避していくように心がけた。なるべく大人側の都合で強制終了したくないと考えていた。 ・客席にいるこどもも中で演じているこどもの劇世界に同調し始めた場合は、止めたりしないようにした。また、演技を止めたくないこどもに対しても無理矢理強制終了させるのではなく、あくまでもその劇世界の中で話の流れをつくっていくように心がけた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・かまきりに変身している最中に、他のこどもが舞台に急に入ってくる。アシスタントがお母さんかまきりになって舞台に入り丸くおさめる。 ・かえるに変身しているとき、こども2人がジャンプしてぶつかり合い、危ないのでアシスタントがうしがえるになって舞台に入り、2人を退場させる。 ・猫に変身したこどもが、チョコを食べているしぐさをしていたとき、外で見ていたこどもが「えさやるで」と言う。猫はそのこどものところに行って食べる真似をした。退場の際には、外のこどもが手で門を作り、猫にこっち、こっちと退場を促したが、猫は舞台にまだいたいようでなかなか外に出なかった。 	

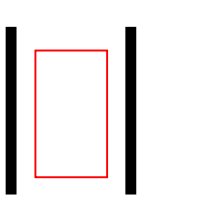
ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>休み時間</p> <ul style="list-style-type: none"> ・こどもたちは水分補給やお手洗いなど、しっかり休憩を取る。 			
<p>メインコンテンツ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講師が、これから行うことの説明をする。「画用紙は台本です。この中にはみんながなりたいものとお話を書いてあります。」「まず先生たちでやってみますので見ていてください。」 ・アシスタントと講師が、あかちゃん、クマ、猫の役で短いデモンストレーションを行う。 ・3グループに分かれてなりたい役と話を決める。ストーリーまで決めることができなかつたので、講師、アシスタントが話の展開をナレーションでフォローする。 <p>とんぼチーム：「雪だるまのきれいな家」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3匹のうさぎと猫がいた。うさぎが耳をとじたので猫がどうしたのと聞くと、家の中にブタがいるみたいと答 	<ul style="list-style-type: none"> ・「台本」という新しい概念を理解してもらうためにデモンストレーションを行った。 ・最初の創作では、まずこどもたちには自分になりたいものを自分で決めて、それを講師たちに伝えることができればよいこととした。また、自分で役を決められないこども、舞台に立ちたくないこどもにも、こちらからいろいろ提案はするが、無理強いはしないよう心がけた。 ・ふすまの向こうにいるブタの役を、客席に座っている同じチームのこどもを即興で指名した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・話が展開していく様子を興味をもって見ている。 ・自分のなりたい役や場所の設定を一緒に考えている。 ・舞台の外側でブタの鳴き声 ブタがいるみたいと言って声をあげる動作をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・いつもはなかなか自分を出せないこどもも、どんな表現も受容されるという中で、のびのびと自分を出せていた。

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>えた。ふすまを開けたらブタがいた。</p> <p>メロンチーム：「きれいな家」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あるきれいな家にやってきた女の子は、家の中のかえるにびっくりする。かえるが出て行くとオオカミがやって来て女の子を食べてしまった。オオカミが寝ているうちに猫に助けられ、おなかの中から出ることができた。 <p>うさぎチーム：「おすし屋さん」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お寿司屋さんに雄トラと雌トラが来てお寿司を注文する。 <p>「何にしますか」</p> <p>「じゃあ、いくらをどうぞ」</p> <p>このような調子でやりとりしながら、たまご、まぐろ、いかを食べる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「次はまたお話をつくって練習してお母さんたちに見せましょう」と、次回の予告をする。 		<ul style="list-style-type: none"> ・猫役のこどもが「えさが欲しい」と言う。バナナは「いらん」と言ってポーンと投げる ・大人が積極的に話を考えて伝える中で、こどもからアイデアが出てきた。 <p>「ふくろうの声がしたい」と、声の出演を提案していた。</p> <p>寿司屋の設定について、回転寿司のイメージを伝え、そのイメージでお話をつくっていった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「家の鍵をもっているから帰った。」と、設定の細かい部分をもイメージして表現しようとしていた。 ・日時について、「金曜日」ということにこだわっているこどももいた。 ・もじもじしていてしようかやめようか迷っていたこどもが、後半では自信をもって出てきていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今まで他のこどもがしていることを同じように真似ていたが、自らの演技を初めてした。 <p>普段あまり食べる方ではないのに、いろんな物を食べたり大好きなバナナを「いらん」と言って放り投げる演技をしたのは、猫になった自分がその時感じたこと、演じたいことをしていたからではないかと思う。</p>

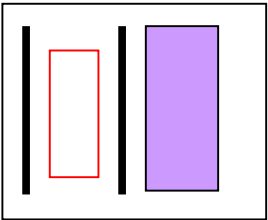
「3回目 11月5日 9時30分 - 12時30分」 保育参観として実施

講師：わたなべなおこ、アシスタント：綾田将一・中田絵美子
 参加者：5歳児21名 4歳児（見学）19名、保護者（見学）30名
 会場：2階プレイルーム

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
開始前： ・前回同様、こどもたちの名札を講師、アシスタントの体に貼り付ける。			・朝から楽しみにしていた。普段は登所の遅いこどもも、今日は早かった。
プログラム： 舞台づくりなど ・前回同様、テープを貼って舞台をつくる。  ・「今日は発表会です。最初は練習です。」 ・こどもたちが発表の後に歌う予定の歌2曲を歌う。（「スマイル」（手話つき）と「地球はみんなのものなんだ。」） ・前回同様、こどもの名前を呼んで、名札を貼っていく。 ・欠席したこどもの名札も、講師、アシスタントの体に貼ったままにし、	・舞台を大切に扱ってもらうことと、空間の大きさを体で把握してもらうために、こどもたち自身が舞台づくりを行った。 ・発表会をする前に練習をすることを伝え、少しでも緊張をほぐすよう心がけた。 ・ウォーミングアップと練習を兼ねて最初に歌を歌うようにした。 ・こどもを抱きあげたり、抱きかかえたまま回るなどして、体を動かすことでこどもの緊張をほぐすようにした。	・今日は発表会だということをもみな分かっているので、何でもないような素振りをしつつも顔がちょっとこわばっていたり、内心とても緊張している様子である。 ・みな緊張しながら歌を歌っていた。 ・手話歌はあまり声が出ていなかったが、歌だけの時は大きな声になった。 ・抱っこして振り回してもらっている友達を見て「やりすぎ」と大きな声でくり返していたこどもが、最後に呼ばれたとき、おみこしをしてもらい大喜びして	

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>「一緒に参加していますよ」という思いを伝える。</p>		<p>いた。</p>	
<p>たまごから生まれるショー（練習）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3チームに分かれ、それぞれに段ボールのたまごを1つずつ用意する。 ・小さな粒になって段ボールの中に入り、段ボールをたたいたり動かすなどした後、かけ声をかけて段ボールを開ける。そのとき、何かに変身する。 ・何に変身したのかこどもに尋ねる。うまく表現できないこどもには、周りのこどもに「何になったと思うか」を尋ねる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・たまごに入るのをこわがるこどもがいたが、たまごを少し開けておくことで入ることができた。 ・観客から自分の演技がどう「見えた」のか、そのことも演劇の楽しさであることを踏まえて声がけた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・たまごが動くのが面白くて、「動いて」と催促していた。 ・泣き出して出ていったこどもがいた。（無理強いせず、その後保護者と一緒に見学をする。） 	<ul style="list-style-type: none"> ・緊張していたので自分で表現するのが不安になったようだ。普通の保育ではスムーズに課題をこなしていくこどもであったが、自らの発想で表現することに慣れていないようであった。
<p>演劇ワークショップ（練習）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・チームごとに分かれる。こどもたちになりたいものやつくりたい話を聞いて、講師、アシスタントが画用紙に書き込む。 ・演じる人は楽屋（a）に集合し、見る人は観客席（b）に移動する。 <div data-bbox="215 1668 459 1915" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p style="text-align: center;">a b</p>  </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・前回と同じ流れ、同じ手順で創作を行った。役を決めたり話を考えたりするところは、ギリギリまで時間をかけるようにした。 ・演じる人と見る人の場所を明確に分けることで本番の発表の雰囲気を実感できるようにした。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2回目のワークショップで一度経験していたため、要領が分かっている様子であった。 	

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>メロンチーム 「猫のおすしやさん、な んでやねん」 ・大きなたまごがあった。 巨人がやってきて食べよ うとすると、たまごから 4匹の猫が生まれた。 ・巨人のあかちゃんとポ ケットモンスターが現わ れてじゃれて遊んでいる と寿司屋が魚を買って登 場。夜になったのでみん な帰った。」</p> <p>とんぼチーム 「北極のきれいなおう ち」 ・北極に住む3人のきょ うだいはペットにペンギ ンを飼っている。そこに 雌トラがやってきて3人 を探すが見つけれな い。雪国の精がやってき て3人を助け出す。</p> <p>うさぎチーム 「雪だるまのきれいな 家」 ・ふくろうの声が聞こえ る。ひとしきり吹雪が吹 き、やがて雪が止む。(た まごに使ったダンボール をたたいて効果音を出 す。)お母さんがやってき て料理をしている。</p>	<p>・演じた後、講師から「舞 台の外に出てやってい たので見にくかったで す。本番は、たまごを舞 台の中に入れて、舞台の 中で動いてください。」 と助言する。</p> <p>・演じた後、講師から「も のすごく上手にできま した。あとは雌トラさん が舞台の前に出て暴れ てくれたらもっといい ものになると思いま す。」と助言する。</p> <p>・残り時間が少なくなっ てきたので、うさぎチー ムの発表の終了予定時 間を伝え、時間が来たら 途中で終わることを予 め伝えておく。</p>	<p>・うさぎチームのこどもた ちは、タイムリミットで最 後まで発表できなかった がその前の創作の時間で 自分たちの作品に十分手 ごたえを感じていたので 動揺はまったくなく、自信</p>	

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
(ここで時間がきたので終了。)		に満ち溢れていた。	
休み時間	・保護者と4歳児クラスのこどもたちが入ってくる。		
<p>たまごから生まれるショー(本番)</p> <p>a b c</p>  <p>a : 演技者 b: 4歳児クラス c : 保護者</p> <p>・保護者、4歳児の前で、劇の発表に先立ち「たまごから生まれるショー」を行う。</p>	<p>・後ろの方にいる観客にはなるべく舞台に近いところで見てもらうように促した。</p>		

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>演劇ワークショップ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・始まりを伝える。「今から演劇をします。他のチームはお客さん席へ移動してください。」 <p>メロンチーム</p> <p>「猫のおすしやさん、なんでやねん」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・寿司屋が魚を買って来るところまではリハーサルと同じ。その後、猫が客となり寿司屋との一風変わったやりとりが続く。 <p>とんぼチーム</p> <p>「北極のきれいなおうち」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ストーリーはリハーサルと基本的に同じ。(ただし、ペットのペンギンのお父さん、お母さんも登場する場面が加わる。) 		<p>【保護者の感想から】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・少し恥ずかしそうにしていたが、楽しんでやっており、積極的に手を挙げている姿を初めて見た。人前でちゃんと表現をできるようになったことに成長を感じた。 ・“いきいき”と“てきぱき”と“のびのび”ととてもいい笑顔で楽しむ姿と周りのこどもをリードしている姿を見て、我が子の成長を感じた。 ・2回目、我が子が楽しそうにはじけているのを見てうれしくなった。また、親が思っていたのと違った我が子の一面も見ることができた。 ・いつもは緊張すると小さい声になるのに、大きい声で自分らしさがすぐ出ていた。 ・穏やかに自分の意見が言えていることに感動した。 ・当日の朝、休みたいと言っていたほど緊張していたが、劇の中では声だけの参加だったけれど“ふくろう”が表現できてよかった、がんばったと思う。 ・自分で想像して動くのは一番苦手。人の真似や指定されたことは何とかできる様になったけど・・・でもががんばっていたと思う。 ・2回目の時は、いざ発表と言う時に何もできなかったのが、今回は始まる前から「お姉さんするから見ててなあ」とはりきる姿があった。 	

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>うさぎチーム</p> <p>「雪だるまのきれいな家」</p> <p>・吹雪が止んだ後、家の中ではお母さんがオムライスをつくっている。そこに次々とかえる、うさぎ、かまきりがやってきたので、それぞれにオムライスをあげる。夜になってふくろうの音が聞こえてきた。(こどもが鳴き声をまねている。)</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・自分らしい役を選んだことと、その役を恥ずかしがらずにしっかりと役目を果たしていたことがよかった。 ・のびのびと楽しそうに演技していた所がよかった。又、たくさんの人の前でもいつも通りの自分を出せている所が凄いと思った。 ・家とはまた違った表情をしていたように思う。 ・演技をするのが大好きなのでとてもイキイキとしており、恥ずかしがらずに演じていた。普段、のんびりとしているのに積極的にハイ！と手を挙げていて驚かされた。 ・恥ずかしがり屋だけど手を挙げて一生懸命に演技していた。 ・普段、あまり積極的ではないのに「やりたい」と手を挙げていたりみんなの前で恥ずかしがらずにやっていたりと驚かされた。知らない一面を見た気がする。 	
<p>歌の披露(12:10)</p> <p>・歌の後、4歳児と保護者にインタビュー。「楽しかった。うれしかった。」とのこと。</p> <p>・最後に5歳児クラスのこどもたちから講師、アシスタントに折り紙でつくった首飾りをプレゼント。</p>	<p>・残り時間が少なくなっている中でも、観客の意見や感想を聞く時間をとることで、こどもたちが自分たちの演技を客観的にフィードバックできるよう心がけた。</p>		

* 全体のこどもの様子を見て感想（保護者アンケートより）

- ・楽しそうにやっているなあと思いました。お母さん達が来ているので緊張している子もいましたが、それぞれよかったと思います。
- ・大人でもあのようなエチュード的な表現をまして人前でするのは難しいこと。それを楽しんでのびのび自由に表現できる。まさにこどもならではの発想、表現。大人はどうしても正解を探してしまう。でもこどもたちはすべてが正解。本当に自由に全員がイキイキといい顔でやっていました。普段元気な子が少し恥ずかしそうだったり、おとなしい子がはじめていたり、見ていても楽しかったです。とてもいい企画だと思うのでこれからも続けていただけたら嬉しいです。
- ・みんな笑顔で楽しそうにしていたと思います。
- ・自由に表現させてもらっていることもあり、こどもたちの目がキラキラしていた。楽しんで役を演じていた。恥ずかしいけどやってみようかなあ、楽しいかもしれないと思えるところが凄い。
- ・普段は恥ずかしがりやの子もみんなの前で発表できたりして素晴らしい。
- ・短時間の間に自分の役割、台詞、話の流れを覚えてすごいなあと思った。やっている間、みんなとても楽しそうだったが、自分がしていない時もう少し落ち着きがあればもっといいのになあと思った。
- ・ひまわりぐみのこどもたちはみんなどんな事でも楽しむパワーがありますが、ワークショップではまたいつもとは違う楽しくイキイキとした笑顔を見ることができたと思います。“やらされている”のではなく自分から楽しんでいる感じでした。
- ・みんな楽しそうに表現していたと思います。自分なりに役を考えて表現していたのですごく良かったです。
- ・騒ぐ時は騒ぐけれど静かにしなければいけない時は黙っていて、みんなしっかりしてきたと思います。ただ、恥ずかしがりやの子が多かったですね。
- ・やりたいんだけど・・・ともじもじしているこどもたちも周りの雰囲気に乗せられて恥ずかしそうに演じているのがとてもかわいかったです。
- ・自然体でとても楽しそうでした。
- ・恥ずかしがりやの子がいたり、積極的に手を挙げたりと色々でしたが、がんばったひまわりぐみに花をあげたいです。観客席からも楽しませてもらいました。
- ・2回目、3回目と両方見せてもらって、印象に残ったのは2回目です。3回目はちょっと緊張感なく演じる？表現する？そのあたりの気持ちが伝わらなかったような。もちろん劇自体は3回目の方がよかったと思うのですが。先生方と仲良くする方が楽しかったんでしょうね。いろんな子の知らない面を見ることができました。何回も練習して成果を見てもらう運動会や発表会とは違うよさがあって自分を自由に表現する、こういう機会はきっとすごく大切なだろうと思います。
- ・こどもたちが本当にお兄さん、お姉さんが大好きなのが伝わってきました。

「全体を通した振り返り」

<p>演劇ワークショップに対する当初のイメージはどういうものでしたか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ プロの方がこどもとかかわりながら、演劇であるからできる自由な表現が生まれ、生き生きとしたこのこどもたちらしい姿が見られるだろうと思った。 演劇の手法が、伝えてもらう、講師の演技を見て模倣するといった内容かな？と思った保育士等イメージは色々であった。
<p>演劇ワークショップを実際に経験して、どのような印象をもちましたか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ こどもたちが、思いきり受け入れてもらい自分が大切にされている、かかわってもらえている安心感と期待感がもてていた。 ・ こどもの意志で、“ やってみる ” “ 見ておく ” も含め表現していた全てを認めてもらっていた。 ・ こどもたちの何気ない動き、言葉も見逃さず、自由な発想を大切に、広がっていくようなアドバイスをしていた。
<p>第1～3回を通して、ワークショップ中のこどもたちの様子に変化はありましたか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 最初は自分の表現に自信がなかったこどもが多かったが、回を重ねるごとに自信をもち、色々な表現が出てきた。こどもたちはワークショップを初めから楽しみにしていたが、1回目より2回目と期待が膨らんでいた。
<p>第1回ワークショップ以降、こどもたちの普段の様子にどんな変化がありましたか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今まで友達に何か言われるとすぐに涙ぐんでしまい、なかなか自分の思っていた事が言えなかったこどもが、少しずつ自分の思っている事を言えるようになってきた（他のこどもたちもそのこどもの言い分に耳を傾ける。保護者も表現できるようになってきたことを認めるようになった）。自信につながっている。
<p>演劇ワークショップの内容(手法等)について、今後の教育・保育活動に、どの点が参考となりましたか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 初めての出会いの中でも1人ずつときちんと対面しかかわっていく手法（体にこどもの名前のテープを貼り対面。箱に入ることで異次元の世界を体感させる、ストーリーをつくる時こどもの声を書きながら確認する等） ・ こどもを管理するのではなくこどもの内にある物を引き出し、発見した事をきちんとこどもに伝え自信をもたせている。 ・ アクシデントも工夫や活力に変えていく生きる力の面白さを感じた。 ・ 大人自らも真剣に表現しこどもたちに見せている。
<p>演劇ワークショップを経験して、意外だったことや印象的だったことは何ですか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 普段リーダー的で課題をきちんとこなしていくタイプのこどもが、舞台にあがることに消極的になっていた。逆にあまり自分の思っていることを言わないこどもが積極的に舞台にあがっていた。 舞台発表も家族で見に来る家庭が多く、観客席と演じる側の一体感があった。感想を寄せて貰う中ではこどものよかった表現に着目しようと言う事で伝えてもらえた（渡辺先生からのアドバイスより）。

3. 市立日本橋小学校・日本橋小学校附属幼稚園（実践報告）

「1回目 10月20日 3-4時間目 45分+45分」

講師：わたなべなおこ、アシスタント：綾田将一・中田絵美子

参加者：5歳児6名・小学校1年生11名 計17名

会場：リズム室

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>開始前：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちの名札を作り、アシスタントは自分の体に貼り付けておく。 養生テープで線をひき、舞台（1）と客席の境界をつくる。 ・5m四方の舞台（2）をテープでつくる。 	<p>舞台（1）</p> <hr/> <p>客席</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> <p>舞台 （2）</p> </div>		
<p>プログラム：</p> <p>あいさつ（講師陣は舞台（1）に立つ。子どもたちは客席）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講師とアシスタントの自己紹介の後、演劇ワークショップで行うことの説明と留意点を伝える。 <p>・「今日は楽しくみんなとゲームをしたりしながら演じることを楽しみたいと思います」「やりたくない人は無理にする必要はありません。」</p>	<p>・演劇のワークショップは普通の学校の授業等とは違う時間の過ごし方をするということ（授業等で必要なきまりとワークショップで必要なきまりは異なること）を伝えるよう心がけた。</p>	<p>・初めて出会う人や場の雰囲気、少しびくついた様子で部屋に入ってきて、なかなか講師たちには近付けない。みんな緊張や不安を感じているように見えた（講師との距離間を感じた）。</p>	<p>・1年生がおとなしく見えたのは、年下の5歳児と一緒にだったので「お兄ちゃん、お姉ちゃんらしくお手本になろう」と思っていたからだと思う。普段からのかかわりがあるので、「年上として」という意識をよけいにもったのではないか。</p> <p>・5歳児は、大好きな1年生と活動することをとても楽しみにしていた。</p>

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>自己紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アシスタントは名札をはがしながら、書いてあるこどもの名前を呼ぶ。 ・呼ばれたこどもは舞台(1)にあがる。アシスタントが胸に名札を貼り、こどもと握手をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・こどもたちが緊張している様子を感じたので、一人一人に時間をかけてかかわるよう心がけた。 ・一人一人の顔をしっかりと見て丁寧に接するように心がけた。 		<ul style="list-style-type: none"> ・初めて会う講師たちとのスキンシップとしてよい方法だと思った。こどもたちとの距離がとても縮まったように思う。
<p>ウォーミングアップ</p> <p>【1】王子様、お姫様になりましょう！</p> <ul style="list-style-type: none"> ・椅子を一脚、5m四方の舞台(2)の中に置く。この椅子は王子様、お姫様の椅子で、これに座ったこどもは王子様、お姫様に変身する。王子様・お姫様は、指名したこどもにボールを投げ、次々と交代していくというルールであることを知らせる。 ・まず椅子に講師が座り、お姫様になった講師がアシスタント(綾田)の名前を呼んでボールを投げる。アシスタントは、ボールを拾い、走って椅子に座る(講師は椅子の横に立ち、以降は椅子に座った王子様やお姫様と会 	<p>(このウォーミングアップのねらい)</p> <ul style="list-style-type: none"> 講師とアシスタントがこどもたちの顔と名前を覚えること 「役」になって接することで初対面のこどもたちとの距離を縮めること こどもたち一人一人に話しかけることでそのこどもがどのようなこどもなのかを知ること ・一人で人前に立って話をするのはとても緊張して自分らしさが発揮しづらい。ここでは、役になることでなるべくストレスなく舞台にい 	<ul style="list-style-type: none"> ・王子様、お姫様になりまず、と聞いてちょっと恥ずかしそうにしながらも嬉しそうだった。 ・1年生は、王子様、お姫様の会話を聞きながら楽しんでいる。 ・1年生は1年生(男子は男子、女子は女子)、5歳児は5歳児を指名することが多かったが、1年生男子から、「女子も当てたれや」という意 	<ul style="list-style-type: none"> ・会話を聞く楽しみもあったので、“ドキドキ感をもって待っているのかな”と思えた。 ・指名の際、1年生は5歳児を、5歳児は1年生を指名するというルールづくりをあらかじめの方がよかったように思う(5歳児は、1年

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>話していく)。椅子に座ったアシスタントは、王子様に変身し、こどもたちのうちの誰か一人の名前を呼んで、ボールを投げる(転がす)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボールを受け取ったこどもは、王子様、お姫様の椅子に座る。講師は変身したこどもに触りながら、「温かい!あなたは温かい王子様なのですね」「ビリビリッとする!電気のお姫様なのですね」と、一人一人に特徴を付けて表現する。 ・講師は、「王子様(お姫様)どなたとキャッチボールされますか?お名前を教えてください」とこどもに聞く。こどもはキャッチボールするこどもの名前を呼び、そのこどもにボールを投げる。相手がボールを受け取ったらお互い走って交代する。 ・以下、次々に交代し、全員が椅子に座る。 	<p>られるようにすることと、講師との会話形式で話をすることで、そのこどもらしさが出るようにフォローしていく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コメントはそのこどもを見て感じたことやイメージしたことを表現するようにした。 ・1年生同士でキャッチボールし交代をしたとき、とても速くてかっこよかったので、そのことをこどもたちに伝えた。 	<p>見が出ていた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年生がすばやくボールを拾って椅子に走っていく様子を、5歳児は「すごいなあ」というまなざしで見ている。 	<p>生を呼びづらいこともあったのでは)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年生は5歳児と一緒にいることで自分たちなりに「しっかりしなければ」「小学生としてよいところを見せなくては」という思いが感じられる。

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>休み時間：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・こどもたちは水分補給やお手洗いなど、しっかり休憩を取る。 ・次のメインコンテンツで使用する段ボールにテープを貼る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・段ボールの補強作業を手伝ってもらう中でこどもたちに積極的に声をかけ、コミュニケーションをとるよう心がけた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・講師たちが段ボールの補強を行っている時、1年生の女子が集まってきた積極的に手伝い、手際よく補強していた。5歳児も1年生がしているのを見て「僕らもやりたい」と言って手伝っていた。 	
<p>メインコンテンツ「舞台の上で表現してみよう」</p> <p>【1】変身してみよう(たまごから生まれるショー)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・舞台(1)に、段ボールを二つ並べ、説明を行う。「これは四角いたまごです。みんな、この中に小さくかがんで入ってください。段ボールを被せて、次に開けるととき好きなポーズをとってみてください。」 ・こどもたちに舞台の中でかがんでもらい、その上に段ボールを被せる。(段ボールが舞台の幕の代わりになる) ・アシスタントが段ボールを開けたら、こどもたちは好きなポーズをとりながら飛び出す。動かないでポーズをとってもよいし、動いたり声を出し 	<ul style="list-style-type: none"> ・段ボールを被せてから開けるまでの間は、一人一人にできるだけ時間をかけるようにした。 		<ul style="list-style-type: none"> ・休憩時に講師とふれあえたことで緊張がほぐれ、休憩後こどもたちの動きに変化を感じる。 ・「たまごから生まれる」ことに対して、何らかの場面設定があった方が、こどもたちに多様なイメージを湧かせやすいのではと思った(「森の中にたまごがあります・・・。」というストーリーをつくるなど) (講師の振り返り) ・大きな段ボールだったので、2人で(1年生、5歳児のペアで)入って生まれてみる、などすればもっと幼小のかかわりがもてたと思う。

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>たりしてもよい。</p> <p>・「次、やってみたい人」と問いかけ、手を挙げた子どもから順番に当てていく。</p> <p>・段ボールを被せたら、外からトントンと叩いてみる。箱の中の子どもから反応があったら、「動いてるよ!」と見ている子どもたちに知らせる。</p> <p>・「箱をトントンしたい人!」「はい」で手を挙げた子どもを当てて、一緒に段ボールを叩き、中の様子を探ってみる。最後に子どもたち全員が舞台(1)にあがって、段ボールを叩く。</p> <p>・「みんなで開けましょう」とみんなで段ボールを開ける。</p>	<p>・舞台上にあるたまご(段ボール)の中にあるこどもの小さな変化も、見ている子どもたちに言葉で伝えるようにした。</p>	<p>・たくさんの子どもたちが手を挙げるようになったら、「トントンしてもらう人は、先生から一番遠く離れた人にします」と宣言。子どもたちは、歓声をあげながら、部屋の端々に散らばり、ドキドキしながら待っている。</p> <p>・「きちんと座って見る」「ちゃんとしとかなあかん」など1年生が5歳児に話している。</p>	<p>・5歳児は、一人一人順番の取り組みでは、待つことがしんどくなってくると思う。</p> <p>・手を挙げている人は、「どう動くか」を考えた上で挙げていると感じる。</p>

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>【2】デモンストレーション（舞台上で変身してみよう）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・四角い舞台の周りを囲んでみんなで座る。講師より今からすることの説明。「この四角の中は舞台、みんなが座っている四角の外は客席です。この四角い舞台の中に入ると、もう自分ではありません。自分じゃない何かに変身してしまいます。舞台の外に出ると元の自分に戻ります」 ・言葉で説明したことを講師、アシスタントが見本として実際にしてみせる。講師たちが舞台の中で何に変身したのかを、子どもたちが当てる。（猫、蛾、猿に変身） ・「変身してみたい人！」と子どもたちに聞き、手を挙げた子どもの中から指名する。「何に変身しますか」と尋ね、答えたものに変身する。 ・子どもたちは、舞台（2）に入った瞬間から変身したものになりきって動く。変身して動いている子どもに、講師が「何か探しているのかな。何をしているところかな」と 	<ul style="list-style-type: none"> ・一人で舞台上に立つことが難しそうな子どもにはアシスタントと一緒に舞台上に入ってサポートしたり、「お友達と一緒に変身してみようか」と提案する。 ・それも難しい場合は無理強いせず「後にする？」「客席で『見る』こともとっても大事なことからよく見てあげてね」と声がけするよう配慮する。 ・初回はできるだけ一人一人のペースに合わせ、せかしたりすることはしないで、子どもからアクションや表現が出てくるのを待つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「犬」になった子どもに、周りの子どもたちがえさを差し出すふりをすると、「ブシャブシャ」と音を立てて食べている。飼い犬がいつも音を立ててエサを食べてい 	

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>質問する。それに応じて、こどもが動き方を変えたら、「よく表現できているね。本物の動きをよく見ているね」と声がけをする。</p> <p>・なかなか手を挙げなかった小学生の女子が手を挙げて、「魚のエイ」に変身した。体が柔らかいのを生かして、足を広げてゆっくりと泳ぐ。</p>		<p>るからとのことであつた。</p> <p>・みんなから賞賛の声があがっていた。</p>	
<p>最後のあいさつ</p> <p>・「今日はとても楽しかったです。来週また来ますので、一緒に遊びましょう。」</p> <p>・「ありがとうございました。」</p>		<p>・まだまだ続きを望む幼稚園児が涙ぐみながら訴えるが、担任から「次があるよ」と話を聞いて、次回への期待をふくらませる。</p>	<p>・次回に期待する気持ちを感じる。</p>

「 2 回目 10 月 30 日 3 - 4 時間目 45 分 + 45 分 」

講 師：わたなべなおこ、アシスタント：綾田将一・中田絵美子

参加者：5 歳児 5 名・小学校 1 年生 11 名 計 16 名

会 場：リズム室

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>開始前：</p> <p>・会場に入ってきたこどもたちと一緒に、四角い舞台をつくるためのテープ貼りをする。アシスタントがテープの貼り方の見本を示してから、20cm程度に切ったテープをこどもたちに渡し、みんなで四角い舞台をつくる。</p>	<p>・準備作業を一緒にすることで、講師陣とこどもたちの距離が近づく効果が期待できるため、開始前にそういう時間もてるようにする。</p> <p>・テープの突起やめくれたところでの怪我を防ぐため、貼り終えた後でテープの強化をする。その際、「きれいに貼れたね。もっと丈夫になるよう、みんなで踏んでみよう！」「手でバンバンしよう！」と遊びの要素を取り入れる。</p>		
<p>プログラム：</p> <p>あいさつ</p> <p>・こどもたちの名札を体に貼り付けている講師、アシスタントが、初回同様こどもの名前を呼び、胸に名札を貼り付けていく。</p>			<p>・こどもと講師やアシスタントとの関係づくりは、第1回目で十分に図られていたので、こどもが創作するための時間を確保するために、第2回目以後、名札貼りは省略してもよかったと思</p>

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>・「今日は、宇宙人のあいさつをします」と伝えて、名札を貼った後こどもたちを抱きかかえてくるくま回ったり、高く抱っこをしたりする。</p>	<p>・「宇宙人のあいさつは荒々しいです。宇宙人は、毎日こういうふうにあいさつしているんです。」と宇宙人になりきってかかわる。講師側から積極的にスキンシップをとることでこどもたちの緊張をほぐす。</p>		<p>う。</p>
<p>ウォーミングアップ 【1】かけっこその1</p> <p>・スタートラインに段ボールを二つ置き、こどもが中に一人ずつ入る。合図とともに段ボールを開けると、中にいるこどもは「鉄砲の弾」になって飛び出し、ゴールに向かって走る。</p> <p>・ゴールには、講師とアシスタント1名がそれぞれ待っていて、走ってきたこどもを抱き止める。</p>	<p>・走るという動作に「鉄砲の弾」というイメージを付け加え、こどもたちが自然と体が動きやすくなるようにした。</p> <p>・「ズドーン」という擬音語で「鉄砲の弾」になる感覚をサポートした。</p> <p>・こども一人一人の表現にコメントをするよう心がけた。</p> <p>・「鉄砲の弾」が的に当たるイメージを体全体を使って表現しやすいよう、「先生たちにしっかりと飛びついてね」と声がけした。</p>	<p>・こどもが走る通路にはみ出して座っている5歳児に、1年生男子が「あぶないで」と声をかけていた。</p>	<p>・こどもの動きに「破壊」をテーマにしたものが多く、教育的立場からは適切ではないと感じた。もっと夢のある明るい設定が適切ではないか。</p> <p>(講師の振り返り)</p> <p>・演劇の世界では、破壊するということは決して悪いものとは捉えていないが、教育活動の一環として行う場合(特に幼児・低学年児童)には、例えば「森の中に木が生えています。その木に登ってみよう」という場面設定にして、スキンシップを図るなどの方法がよかったのではないかと思う。</p>

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>【2】かけっこその2</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スタートラインに段ボールを一つ置き、こどもが中に一人ずつ入る。合図とともに段ボールを開けると、中にいるこどもは「宇宙人の鉄砲弾」になって飛び出し、ゴールに向かって走る。 ・ゴールにはアシスタント（綾田）が待っており、走ってきたこどもをしっかり抱き止めながら、破壊されたビルを演じる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・かけっこその1よりも、もっと速く走るイメージがもてるよう、「宇宙人の鉄砲弾」という表現にした。 ・積極的にスキンシップを取り、言葉や音も活用した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・おなか（ビルの一部）をへこませたアシスタントが、そばで見ているこどもに手を伸ばすと、こどもが何かを差し出す仕草をした。アシスタントがそれを食べておなかが元に戻るのを見て、講師が「セメントを食べてビルが復活しました！」と言うと、今度はアシスタントが倒れるたびに、こどもたちがセメントを差し出すようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「鉄砲の弾」では、こどもの動きが直線的にしかないのでは、他のものにもなれた方がいろんな表現ができたのではないかと思った。 ・ビルを破壊するだけでなく、自分でどのように表現するか選べるような設定でもよかったのではないかと思った。 （講師の振り返り） ・こどもたちに、思いきり走ってほしいという意図があり「鉄砲の弾」にしたが、いろんなものをイメージして（亀ならゆっくり走るなど）みるというのもよいのではと思う。
<p>休み時間：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・こどもたちは水分補給やお手洗いなど、しっかり休憩を取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・休憩中も一緒に遊んでコミュニケーションをとるよう心がけた。 		

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>デモンストレーション (舞台で変身してみよう)</p> <p>・四角い舞台の周りを囲んでみんなで座る。講師より今から行うことの説明をする。「この舞台の中で、追いかけてこの劇をします。」</p> <p>・「変身してみたい人！」と子どもたちに尋ね、手を挙げた子どもの中から指名する。「何に変身しますか」と尋ね、答えたものに变身する。</p>	<p>・休憩時間に追いかけてをしたことを活用して創作しやすい雰囲気になるよう心がけた。</p>		
<p>カメレオンになったこどもの話(ストーリー)</p> <p>・カメレオンが歩いていると、舞台の周囲で見ている子どもたちが食べ物を差し出してきた。カメレオンはおなかがいっぱいになって寝てしまった。</p> <p>・そこにカラスが飛んできて襲おうとしたが、猟師がカラスを撃ち、カメレオンはカラスを食べて再びおなかがいっぱいになった。</p>	<p>・ストーリーは、できるだけ子どもたちが舞台の中で活発に動けるよう、講師がリードしていく形ですすめていった。</p>		<p>・子どもたちにプロの演技を見せてあげてほしいと思った。せっかくの機会でもあるし、「いろんな表現があるよ」ということに子どもたちも気付けたのではないかな。</p> <p>(講師の振り返り)</p> <p>・プロの演技を見せた場合、「こんなふうにはできない」と萎縮してしまうこともあるので、見せるかどうかは判断が必要となる。今回は、子どもたちがしっかりと表現できていたので模範演技は必要ないと感じていた。</p>

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>肉食ライオンの強いきょうだいになったこども（二人）の話（ストーリー）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ライオンのきょうだいがうさぎを食べようとしていると、周りのこどもたちがチョウチョになってライオンを追い払った。 ・きょうだいげんかをしていると、お母さんライオンが現れ二頭を追いかけるが、お母さんライオンはあまりに早く走りすぎて宇宙まで飛んでいってしまった。 <p>かわいい二匹のうさぎになったこどもの話（ストーリー）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・二匹のうさぎが、山でブドウを食べているとライオンがやってきて食べられてしまう。 ・おなかがいっぱいになったライオンが寝ていると猟師がやってきてライオンのおなかを開きうさぎを助ける。 <p>うさぎと猫とねずみになったこどもの話（ストーリー）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・登場人物や設定などを元にストーリーを提案していくようにした。 ・二人がライオンになりたい、ということだったので「それじゃあ二人はどのようなライオンなのか？」とライオンを演じるこどもたちに、二人の関係やキャラクターについて質問し、設定を明確にしてから始めるようにした。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達の動きを見て感じたことを話していた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・周りのこどもも劇の中に意識としては参加していた。

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>・二匹のうさぎがにんじんを探していると、ノラ犬に襲われるが、魔法使いが現われてノラ犬を大きなにんじんに変身させてしまう。</p> <p>・そこに猫がねずみを探しにやってきて、本物のねずみとにせもののねずみと出会う。猫は、本物のねずみを探して追いかける。</p> <p>さいごのあいさつ</p> <p>・「次はみんなにお話を考えてもらいます。次までにどんなお話にするか、何に変身するか考えておいてください。」</p>	<p>・今日、講師が担当したストーリーづくりの部分を次回は子どもたちにしてもらいたいということを伝え、子ども自身次回ワークショップの流れについてイメージしやすくなるよう予告した。</p>		<p>・ワークショップ終了後、教室の戻った1年生の子どもたちが、「次はこういう劇をする」と次回のストーリーなどを男女それぞれ話題にしていた。</p>

「3回目 11月18日 3-4時間目 45分+45分」

講師：わたなべなおこ、アシスタント：綾田将一・青空まる子

参加者：5歳児5名・小学校1年生11名 計16名

会場：多目的室

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>開始前：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前回と同様、こどもたちと一緒に舞台づくりのテープ貼りをして、四角い舞台を完成させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・講師陣とこどもたちの距離が近付くよう、準備作業を一緒に行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前回よりかなり日があいていたが、こどもたちは元気いっぱい走り回っており、リラックスしている様子だった。 	
<p>プログラム：</p> <ul style="list-style-type: none"> あいさつ、ウォーミングアップ ・あいさつのおと、今日の演劇ワークショップで行うことを伝える。 (こどもたちへの説明) ・「今日はみんなに飛行機になってもらいます。」 ・講師とアシスタントは、自分たちの体にこどもたちの名札を貼り付けておく。名札に書いてあるこどもの名前を呼び、指名されたこどもが段ボールに入る。講師、アシスタントが大きな声でこどもの名前を呼んで段ボールを開けると、こどもは「飛行機」になって飛び出し、5, 6m先にいるアシス 	<ul style="list-style-type: none"> ・前回行ったエクササイズを応用し、前回同様、積極的にこどもたちとスキンシップを図るよう心がけた。 		<ul style="list-style-type: none"> ・2回目から3週間ほどあいていたが、開始前の舞台づくりを一緒にしている段階で、すでに講師との距離は縮まっていたように思う。そのため、名札貼りなどの時間は簡略化できたのでは、と思われた。

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>タントに向かって走る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アシスタントは、こどもをしっかり抱き止め、抱きかかえてくるくる回ったり、高く抱っこしたりした後、胸に名札を貼り付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・最後の方では、待っているこどもと一緒に段ボールから飛び出すこどもの名前を呼ぶようして、一体感をもって終われるよう配慮する。 		<ul style="list-style-type: none"> ・こどもたちは、普段（女性の先生が多いこともあり）高く抱きかかえられたり等の激しいスキンシップをする機会が少ないので、楽しんでいたように思う。
<p>グループに分かれてお話の創作 （こどもたちへの説明）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「みんなそれぞれ、なりたいもの、変身したいものを考えてください。それが、劇に必要な登場人物、役になります。」 ・「次に場所を決めます。舞台はどんな場所にもなります。みんなで、舞台をどこの場所にするか決めてください。」 ・「次に、みんなどんなことをしたいか、話し合ってください。したいことをつなげるとお話、ストーリーができます。」 <p>（グループ分け）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「3つのグループに分かれます。どんなグループ分けをしたいですか。」 こどもから、「5歳児」「1年生女子」「1年生男子」の3グループという提案があり、その3グループ 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループで演劇を創作していく手順を説明し、前回行なったこと（舞台の上で変身してみよう）とつながりやすくなるよう、心がけた。 ・グループ分けは当初、講師側で1年生と5歳児を混ぜたグループで3に分ける予定だったが、こどもたちの様子を見て、どうというグループで創作したかをこどもたち自身に決めてもらった方がよい 	<ul style="list-style-type: none"> ・1年生の女子がまず「私たちだけでやりたい」と発言した。 ・5歳児女児一名が5歳児チームではなく、1年生女子のチームに入りたいと希望し、1年生チームに入った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・5歳児女児が1年生女子チームに入ったのは、日頃のかかわりの積み重ねから、中に入れてもやっていけるという安心感があったからだと思われる。

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>に分かれてお話づくりを開始する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1グループにそれぞれ、講師またはアシスタントが担当として付く。 (グループ討議) ・グループ内で自分が変身したいもの(演じる役)を聞き、画用紙に書き出していく。 ・大方出揃ったところで、場所を決める。 ・どんなことが起きるか、またどんなことをしたいかを聞いて、話をつくっていく(まとまっていなくても、大体の流れができていればよい)。 ・ここまで決まったことを元に、実際に練習して動いてみる。 ・グループでつくった話にタイトルを付ける。 	<p>と感じたので、急遽変更した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年生女子チームに男性アシスタントを、1年生男子に女性アシスタントを担当として付け、グループ内に他者の存在をつくり、創作がより活性化するようにした。 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ討議のとき、5歳児の女児が1年生女子チームに入ったが、1年生の子どもたちは5歳児がうまく劇の中で登場できるように配慮してアドバイスしていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・1年生男子は、自分たちのチームが4人しかいないことに不安を感じながらも、4人でがんばろうというやる気を感じた。

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>創作した話の発表</p> <p>【5歳児（男児4名）チーム】</p> <p>・発表に入る前に、「『オニイソメ』という水中に住む巨大生物が登場しますが、すごく体が長いので誰か手伝ってください。」と参加者を募ると、6人のこどもが手を挙げたので、ムカデのように列になって練習をする。「『オニイソメ』は半分に切られても、そこから『オニイソメ』が出てきます。それでは、発表の途中で『オニイソメ』の出番になったら、舞台の横に集まってください。」と声かけをする。</p>	<p>・オニイソメのイメージを観客も含め全員で共有できるよう、デモンストレーションの時間をとった。</p>	<p>・「手伝ってくれる人！」で、6人のこどもたち（男女）が手を挙げて、オニイソメ役を手伝った。</p> <p>・実際にオニイソメを表現してみるとムカデのような、へびのような、不思議な生物のイメージがはつきりと観客にも伝わり、見ているこどもたちもこわがりつつも楽しそうにしていた。</p>	<p>・普段の遊びの中で聞いたことのない「オニイソメ」が出てきたことに驚かされた。5歳児の中で「オニイソメ」を知っているこどもは少数だったが、実際に演じてみたことでイメージが共有されているのを感じた。</p>
<p>発表：タイトル「たたかう」(ストーリー)</p> <p>・いろんな動物や植物がいるジャングル。毒グモやきれいな花、チーターや牛が次々と登場する。そこへ、「オニイソメ」が登場すると、牛をペロリと食べてしまったチーターも逃げ出してしまう。</p> <p>・オニイソメは火を吐くライオンとのたたかいでばらばらにされても切り口からまたオニイソメが出てきて逆にライオンを</p>	<p>・物語の世界観をイメージしやすくなるよう、声でジャングルの音を表現することから始めた。</p>	<p>・オニイソメの体の中央あたりに並んで、オニイソメが切られたときに復活する役の5歳児が、列の先頭から2番目に並ぶ。そのため当初表現しようとしていた演技プランができずに終わってしまう。講師が、並ぶ順番が違ったことを説明すると、原因がわかり納得していたが、復活するオニイソメができなかったことについて、と</p>	

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>食べてしまう。だが、ライオンの王にはかなわなかった。</p> <p>【小学生男子チーム】 発表：タイトル「オオカミとトラ」(ストーリー) ・ジャングルでオオカミとトラがけんかをしていた。そこにもう一匹ずつオオカミとトラがやってきて川の水を飲もうとすると大きなクマが魚を取りに来た。 ・4匹のオオカミとトラは一緒になってクマを追い払い、すっかり仲良くなってそれぞれのねぐらに帰った。</p> <p>【1年生女子チーム(5歳児女子含む)】 発表：タイトル「無人島に住む動物」(ストーリー) ・無人島で2匹の猫が遊んでいるとかわいいイルカがやってきて仲良くなった。犬のきょうだいとうさぎもやってきてイルカショーを楽しむ。 ・そこに山から鬼が降りてきてイルカをつかまえようとした。猫とうさぎと犬が力を合わせて鬼を海に追い払った。平和な</p>		<p>ても悔しがっていた。</p> <p>・1年生のしっかりとしたリアルな演技の一挙手一投足を5歳児は食い入るように見ていた。</p> <p>・猫、犬、うさぎが鬼を追い払うとき、それまでの和やかな雰囲気とは打って変わって、とても激しく活発な表現になっていた。</p>	<p>・オオカミとトラが舞台上に登場する位置を、それぞれ別々にしていたのは、幼稚園のころに劇の発表で、劇の構成を自分たちで考えるなどの経験があり、下地ができていたからではないか。</p> <p>(講師の振り返り) ・オオカミとトラの4匹がそれぞれのねぐらに帰る(舞台から出る)とき、一人一人がまったく別々の方向へ向かったのが印象的だった。一人一人が舞台の上で自立した存在であった。</p> <p>・話を進める中で、1年生女子が5歳児女児に、優しい心配りをしてくれていることが伺えた。</p>

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>海でイルカショーが開かれ動物たちはショーを楽しんだ。</p> <p>(3チームの発表を終えて)</p> <p>・講師からのコメント「みんなとても上手に演じられていました。同じ種類の動物でも、一人一人違ってました。」</p> <p>・最後に、幼稚園男児チームの発表をもう一度みんなで行い、「オニイソメ」の演技に再度取り組んでみるよう、こどもたちに提案する。</p> <p>発表：タイトル「たたかう2」(ストーリー)</p> <p>・オニイソメが寝ていると、チーターとライオンがやってきた。チーターとライオンが炎を吐くと、オニイソメの体が途中で切れた。</p> <p>・講師が、列の真ん中を切る。切れたところが先頭になって、オニイソメがもう一度合体した。</p> <p>・チーターとライオンがもう一度炎を吐くと、オニイソメは今度はバラバ</p>	<p>・こどもたちの演技に対して、「一人一人の表現が違ってることが大変よかった。演劇表現は多様性をもっていた方がいいと思う。」という講師の考えを伝えた。</p> <p>・最初の発表でうまくいかなかったところはそのままでと悔いが残るので、やり直した方がよいと思い、オニイソメの部分をピックアップした。</p> <p>・オニイソメ役が最初よりかなり増えたので、連なって歩いたり止まったりを、こどもたちが慣れるまで繰り返し、役のイメージを共有し、動きを練習する時間をとった。</p> <p>・最初の発表でうまくいかなかった部分も、できるだけわかりやすく動きをナレーションし、実際に動きながら練習を行った。</p>	<p>・「みんなとても上手に演じられていました。」との講師のコメントを聞いてこどもたちの表情が真剣な顔から嬉しそうな表情に変わった。</p> <p>・「オニイソメ役を手伝ってくれる人」と聞くと、全員が手を挙げた(チーターとライオン役の5歳児除く。5歳児二人以外、全員オニイソメになって列をつくる。</p> <p>・全員で、ドンドンと足を踏み鳴らして歩いたり、パッと動きを止めたりする。</p> <p>・「おうちに帰っていきました。」という言葉聞いて、こどもたちはお互いにアイコンタクトをとり合いながら、一斉に舞台から</p>	<p>(講師の振り返り)</p> <p>・演じ終えたときのこどもたちの表情が大変自信に満ち溢れ、生き生きとしていたよかったです。</p> <p>・1年生のこどもたちが、「オニイソメ」役のこどものくやしい気持ちを汲み取り、成功させてあげたいと思っている様子が見てとれた。</p>

ワークショップの流れ	かかわりの留意点	こどもの姿	保育者の気づき
<p>ラになって宇宙まで飛んでいった。</p> <p>・最後にハト（講師）がやってきて、チーターとライオンに礼を言って、たまごを渡す。二匹はたまごをもらって家に帰った。</p>		<p>出ていった。</p> <p>・5歳児男児たちは、みんなが一緒に自分たちの考えた「オニイソメ」をしてくれたことがとてもうれしく、また、満足している様子であった。</p>	
<p>最後のあいさつ</p> <p>・「今日は楽しかったかな？今日の楽しかった出来事を、おうちの人やお友達に話してみてくださいね。」</p> <p>・「最後は宇宙人のさよならのあいさつをしたいと思います（胸を叩きながら声を出す）。さよーならー。」</p> <p>・「ありがとうございました。」</p>	<p>・ワークショップの中でフィードバックする時間をとれなかったため、第三者に今日の体験を話すことを子どもたちをお願いした。</p>	<p>・楽しかった思いや活動に対する満足さを感じられ、すっきりした表情で、子どもたちの方から「さよなら」といって部屋を出て行く。</p> <p>・（参考）ワーク後の昼食後に楽しかった所をカット絵でかいた。オニイソメが印象的なようで、それをかく子どもが多く、かきながら、友達に自分の絵の話をしていた。</p>	

「全体を通した振り返り」

演劇ワークショップに対する当初のイメージはどういうものでしたか。	幼	<ul style="list-style-type: none"> ・ 役を交代しながら、いろいろなものになって演じていく。 ・ 決まったストーリーを追うもの。
	小	<ul style="list-style-type: none"> ・ 演劇で遊ぶということがイメージしにくかった。
演劇ワークショップを実際に経験して、どういった印象をもちましたか。	幼	<ul style="list-style-type: none"> ・ こどもたちが、いろいろなものに変身することを楽しんでいる様子が見られ、講師の方のすすめ方が参考になった。 ・ 演劇というものが、より身近に感じられた。
	小	<ul style="list-style-type: none"> ・ 体育での表現遊びや音楽での身体表現とつながっていると感じた。小学校の場合、簡単なセリフもつけて演じる機会があってもよいかもしれない。
第1～3回を通して、ワークショップ中のこどもたちの様子に変化はありましたか。	幼	<ul style="list-style-type: none"> ・ 人に見てもらおうことをより楽しんでいた。 ・ 約束を守って活動しようとする姿が見られた。
	小	<ul style="list-style-type: none"> ・ 走ったり、とんだり、動物のまねをしたりといった身体表現が苦手なこどもも、ワークショップ中の楽しく自由な雰囲気の中で抵抗なくできていた。
第1回ワークショップ以降、こどもたちの普段の様子にどんな変化がありましたか。	幼小	<ul style="list-style-type: none"> ・ その後の活動(学校行事)の中で、1年生女子がはずかしがらずに大きな声を出せていた(全校園集会で、自分たちでつくった店の呼び込み、宣伝)。 ・ もともと仲が良かったが、1年生と5歳児がさらに仲良くなった。
演劇ワークショップの内容(手法等)について、今後の教育・保育活動に、どの点が参考となりましたか。	幼	<ul style="list-style-type: none"> ・ こどもの小さな動きも捉えて、それを言葉で表現することで、そのものへの認識が深まり、想像の世界も広がっていくという点。
	小	<ul style="list-style-type: none"> ・ 指導者側が見本を見せすぎると、こどもたちの自由な表現がせばめられると聞いたこと(こうしなくてはいけない)。見本を見せることで、動きやすくなる場合もあると思うし、その判断が難しいと感じた。
演劇ワークショップを経験して、意外だったことや印象的だったことは何ですか。	幼	<ul style="list-style-type: none"> ・ 舞台と客席を線で区切るという様式だけでなく、椅子やたまごなどを使い、いろいろな形で見る側、見せる側を区切っていたところ。
	小	<ul style="list-style-type: none"> ・ 5歳児との活動は、楽しさの中にも自分たちが手本にならないといけないという意識が、どのこどももしっかりもっていることに気付いた。